

の基本的骨格を整え、世界市場で発現する恐慌に際し労働者階級が総体として選択すべき戦略の検討に立ち向うことは、目下の急務である。そのために本書が生かされるならば、今は亡き著者もそれを本望とされることであろう。

〔渡辺雅男〕

梶田忠彦

『マクロ・ダイナミックス』

——現代インフレーションの基礎理論——

東洋経済新報社 1976.7 xi+250 ページ

(1)

著者は序文の中で「マクロ・ダイナミックスの再構成とそれによる現代インフレーションの理論的な説明を意図したものである」と述べている。まさにこの主題は現代経済学が解明をせまられている最も基本的な問題の一つであり、これに対し著者は全3部・12章からなる本書の中で、いろいろな形をとりながら、くり返しくり返し接近を試みている。著者の立場に必ずしも全面的に同調できぬ読者に対して、著者自ら述べるようにたとえ「風車に立ち向かうドン・キホーテ」に擬せられようとも現代インフレーションの解明のためにはすすんで捨て石の役割を果たさんとする気概と一つの問題を真摯にどこまでも追求しようとする梶田氏の研究姿勢は深い感銘を与えずにはおかないであろう。

このように本書は鮮烈な著者自身の問題意識に裏打ちされて現代経済学の難問に真正面から果敢に取り組んだ野心的労作であり、その内容も高く評価されるべきものである。本書のすぐれた成果を積極的に認めたい。問題がきわめて「今日的」であるがゆえに、そしてまた最も「論争的」な性質をおびるがゆえに、著者のとったアプローチが唯一のものではないこともまた事実である。この点をふまえて、以下では若干の批判的議論を試みることにによって書評の責を果たすことにしたい。

(2)

第Ⅰ部は4つの章と1つの補論から構成されており、ケインズ体系の動学化を短期均衡の視野に限定して取扱っている。ここでの中心的な関心は「均衡動学」・「不均衡動学」のそれぞれの立場からケインズ・モデルを如何に定式化するかという点に向けられる。この点に関してまず気になるのは「均衡動学」と「不均衡動学」の規定の仕方である。著者自身が述べるように両者を区別する決め手を「各時点で均衡が成立するか否か」という点に

求めようとする立場には異論はない。しかしながら、第2章の「均衡モデル」と第3章の「不均衡モデル」がその差異を適切に定式化しているかどうかという点になれば疑問がないわけではない。第2章と第3章の相違点は「財市場」と「労働市場」の需給調整を「定差方程式」で表現するか「微分方程式」で表現するかに求められ、その相違によってそれぞれ「均衡動学モデル」と「不均衡動学モデル」とに位置づけられている。けれども、定差方程式を微分方程式に変換する通学の手続きによって、われわれは容易に第2章の「均衡モデル」を第3章の「不均衡モデル」に帰着させることが可能である。となると、両者の差異は分析手法上のそれに帰せられることになり、本質的な差異は消滅することになってしまう。その意味で第3章のモデルを「不均衡動学」に位置づけるのにはかなり問題があり、不均衡分析に興味をもつ読者に対してミスリーディングな印象を与えかねない。

第Ⅰ部で更に気になるのはケインズのマクロ分析のミクロ的基礎づけに対する著者の配慮が必ずしも十分でない点である。例えば、第4章においてアド・ホックな形で失業率と貨幣賃金率との間に周知のフィリップス曲線の関係を導入し、労働市場の調整を含む短期ケインズ体系の分析を試みている。しかしながら、ミクロ的なレベルから出発してフィリップス曲線を導出する論理的な手順は必ずしも容易なものではなく、またその存在に関する経験的妥当性の評価についても必ずしも意見の一致が見られないというのが正しい現状認識であろう。アローが指摘するようにミクロとマクロの理論的総合は現代経済学において最も不十分なまま残されている問題の一つであり、この認識こそが多くの経済学者をして「不均衡分析」に立ち向かわせる要因になっている点を考慮すれば、この面における著者なりの解釈・説明があってもよかったのではないかな。

(3)

第Ⅱ部は、4つの章と2つの補論から構成されており経済成長の理論を長期均衡への調整という観点からあつづけている。前3章(第5,6,7章)においては、ハロッドと新古典派(というよりも、むしろ正確にはトービンの貢献を端緒とする貨幣的経済成長の新古典派理論)の成長モデルの要約的な解説が与えられている。これに対して、最後の章(第8章)ではバシネッティ的な世界にクールノー的な反応を前提とする労働者・資本家両階級の最適化行動を導入し、そのもとでの資本蓄積経路の安定性が吟味される。

第Ⅱ部の主題を主にマクロの経済成長理論の解説にあ

てられたものであると理解するならば、その叙述は十分こなれており、また論理展開にも著者なりの工夫がみられる。しかしながら、マクロ・ダイナミックスの手法による現代インフレーションの解明を意図する本書の目的からすれば、その取扱い方はいささか平板であり、またその構成に疑問がないわけではない。本書の意図からすれば、新古典派と新ケインズ派の対比という観点から第Ⅱ部経済成長の理論を展望することが不可欠な視点ではなかったのではなかろうか。周知のように両者の間には市場機構の動学的安定性に関して際立った意見の対立がみられる。このような対立がなぜ生じたかを両者の経済成長理論に底流する基本的な世界観(あるいは経済観)の相違にまでさかのぼって解明するという姿勢で整理されたならば、現代インフレーションの理解にかなりな程度の見通しを読者に与えることができ、著者の意図の多くの部分が第Ⅱ部で達成されたのではなかろうか。その意味で、第Ⅰ部の短期的ケインズ体系の延長として、Stein, Hahn, Rose, 宇沢等によって分析されてきた長期均衡の問題としてのケインズ体系が著者自身の立場からなぜ第Ⅱ部において整理・検討されなかったのかきわめて惜しまれるところである。

(4)

第Ⅲ部は、前2部がどちらかというと教育的・解説的な性格を帯びているのに対し、著者自身のオリジナリティーを前面に出した最も意欲的な部分であり、いわば本書の主題の提示部にあたっている。4つの章から構成されており、すでに専門誌に発表された著者自身の論文にもとづいて「現代インフレーション」の理論的解明を精力的に展開する。

著者の基本的な分析態度は現実の経済から「経験的な事実」を正しく把握し、それにもとづいてマクロ・モデルを定式化し、そのワーキングの展開を通して現代インフレーションの基本的様相を明らかにしようとするものである。いたずらに抽象化に走ることなく「事実」から出発して「事実」を説明しようとする著者の態度は了解できる。しかしながら、このような立場が十分に説得的であるためには、事実認識に対する著者の「目の確かさ」とそれに対する「首尾一貫」した姿勢が前提であり、それを理論モデルに抽象化する際の「論理的斉合性」が不可欠なものである。

著者は現代経済の最も重要な「経験的な事実」として「企業の市場支配力」の存在を念頭においているようであり、これこそが「現代インフレーション」の原因であると理解しているように見うけられる。しかしながら、

異なるタイプのインフレーションを分析するとはいえ、企業の主体的行動とそれに付随する市場の調整方式に関して章ごとにいささか場当りの異なる仮説を導入し、分析をすすめる著者のやり方に若干の抵抗を感じ、現状認識に関する著者の「目の確かさ」に一抹の不安を抱くのは評者のみであろうか。

またその「論理的斉合性」に関しても危惧がないわけではない。第Ⅲ部全体にも言えることなのだが、この点が集中的に現われていると考えられる第9章を取り上げて、それを例示してみよう。第1に、物価騰貴を分析しているにもかかわらず現実の需要関数はその財の価格にまったく依存せず、結果的に対置されるべき寡占企業の操作可能な変数に従属してしまうというのはいかなるわけであろうか。このような奇妙な帰結を導くのは、企業行動とそれにもとづいて派生する賃金・利潤が経済主体間にいかなる形で配分され、どのように支出されるのかという経済全体の基本的な構造の規定の仕方に詰の甘さが残るからである。第2に、主観的な需要曲線を想定する寡占企業を前提にしながら、ワルラス的な模索過程を別個に導入する著者の意図は一体どこにあるのであろうか。しかも、現実の価格と結果的に常に一致しない予想価格にもとづいて利潤計算をし、労働雇用量や期待需要を一定のルールにしたがって連続的に変化させていくという企業の行動様式をみる時、この寡占企業のトータルな行動目的が果たして何なのかきわめて不透明である。根岸、アロー・ハーン、二階堂の分析を契機に新たな展開をみせようとする不完全競争の一般均衡論的研究をひきあいに出すまでもなく、寡占企業の行動にインフレーションの原因を求める以上、少なくとも企業の主体的な行動様式に関しては十分説得的な意味づけ(ミクロ的な配慮)が必要であると考えがいかなるものであろうか。

(5)

これまで指摘してきた以外にも本書を通読して物足りなさを感じないわけではない。しかしながら、それにもかかわらず、本書は従来まとまった研究のなかった分野での先駆的研究として高く評価されるにちがいない。しかも、それが大学院進学以来10年の間になしたものであるという事実をふまえるならば一層その感が深い。鶴田氏は研究者としての最初の10年間に経済学者がどの程度の仕事をなすいう点に関して高いレベルのメルク・マールを示された。その意味で、本書が著者の後に続くより若い研究者(評者を含めて)に対して新鮮な刺激と絶好の目標を与えることは確実である。

[本間 正明]